

就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針(仮称)について

「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針 ～こどもまんなか社会を目指すこども家庭庁の創設～」
(令和3年12月21日閣議決定) (抄)

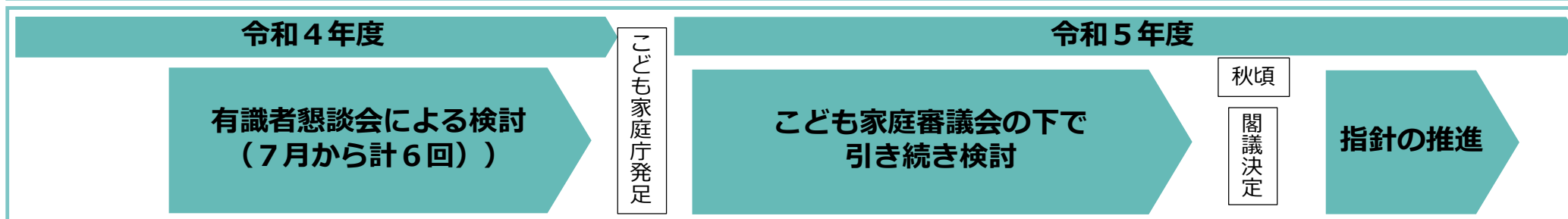
4. こども家庭庁の体制と主な事務

①成育部門

2) 就学前の全てのこどもの育ちの保障

こども家庭庁は、就学前のこどもの健やかな成長のための環境確保及びこどものある家庭における子育て支援に関する事務を所掌し、幼稚園に通うこどもや、いずれの施設にも通っていない乳幼児を含む、就学前の全てのこどもの育ちの保障を担う。また、幼稚園、保育所、認定こども園（以下「3施設」という。）、家庭、地域を含めた、政府内の取組を主導する（就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針（仮称）を新たに閣議決定し、これに基づき強力に推進。）。

会議の資料等は
こちら↓



「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針」に関する有識者懇談会 委員

【幼児教育・保育学識経験者】

◎秋田 喜代美 学習院大学文学部教育学教授、
東京大学 名誉教授

○大豆生田 啓友 玉川大学
教育学部乳幼児発達学科教授
明和 政子 京都大学大学院教育学研究科 教授

【幼稚園関係・保育所、認定こども園関係】

加藤 篤彦 武蔵野東第一・第二幼稚園 園長
坂崎 隆浩 社会福祉法人清隆厚生会
こども園ひがしどり 理事長
柿沼 平太郎 学校法人柿沼学園 理事長

【家庭教育支援】

水野 達朗 大阪府大東市教育長

【子育て当事者（保護者）】

稲葉(奥山) 佳恵 障害児の母
(タレント、俳優)
堀江 敦子 スリール株式会社
代表取締役
吉田 大樹 NPO法人グリーンパパ
プロジェクト 代表理事

【虐待予防】

高祖 常子 認定NPO法人児童虐待防止
全国ネットワーク 理事

【地域子育て支援】

奥山 千鶴子 NPO法人子育てひろば
全国連絡協議会 理事長

【小児科医】

秋山 千枝子 あきやま子どもクリニック
院長

【保健師、助産師】

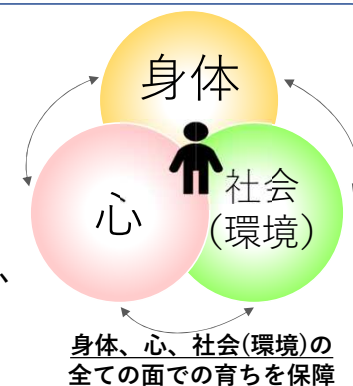
安達 久美子 東京都立大学大学院人間健康科学
研究科 看護科学域 教授

就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針（仮称）素案の構成イメージ（案）

本指針を、**こどもと日常的には関わる機会がない人も含む全ての人**と共有し、こども本人・社会全体双方にとって重要な生まれる前から幼児期までの育ちを保障することが、こどもまんなか社会の実現を通じて全ての人の利益になる。

本指針の目的

こども基本法の目的・理念に則り、**置かれた環境や心身の状況に関わらず、生まれる前から幼児期までを通じて切れ目なく、こどもの心身の健やかな育ちを保障し、こどもの育ちを支える社会(環境)を構築する**ために、**全ての人で共有したい基本的な考え方と、その取組の指針を示すことで、こども基本法の目指す、次代の社会を担う全てのこどもの権利の擁護と将来にわたって幸福な生活を送ることができる社会の実現**を目的とする。



全ての人で共有したい理念

全てのこどもが一人ひとり個人として、その多様性が尊重され、差別されず、権利が保障されている

全てのこどもが権利の主体。「こどもだから」と差別されず、配慮すべき背景・特性の有無にかかわらず差別されず、一人ひとりの多様性が尊重されている。

全てのこどもが安心・安全に生きることができ、育ちの質が保障されている

どんな環境に生まれ育っても、心身・社会的にどんな状況であっても、全てのこどもの生命・健康・衣食住が守られ、ひとしく健やかに育ち・育ち合い、学ぶ機会とそれらの質が保障されている。

こどもの声（思いや願い）が聴かれ、受け止められ、主体性が大事にされている

乳幼児期のこどもの意思は多様な形で表れる。こどもの年齢及び発達に応じて、発せられるこどもの声が聴かれ、その思いや願いが受け止められ、その主体性が大事にされ、「こどもにとって最も善いことは何か」が考慮されている。

子育てをする人がこどもの成長の喜びを実感でき、それを支える社会もこどもの成長と一緒に喜び合える

身近な保護者・養育者が安心と喜びを感じて子育てできることが、こどものより良い育ちにとって大事。保護者・養育者が、子育ての様々な状況を社会と安心して共有でき、社会に十分支えられているからこそ、こどもの成長の喜びを保護者・養育者が実感でき、社会もそれを一緒に喜び合える。

乳幼児期のこどもは

安心したい

身近な人にくっついて、繰り返し抱っこを求めたり、触れ合うことで安心できる。



満たされたい

「食いたい」「寝たい」「清潔にしてほしい」などの思いや欲求を、自分のペースやリズムに合わせて満たしてもらうことで、心地よい生活のリズムが出来てくる。



関わってみたい

多様な人や社会と関わることで、それぞれの違いや個性があることに気づく。こども同士の関わりの中で、様々な感情を経験しながら、人との関わり方が培われる。



遊びたい

身近な環境の中、自分の興味の赴くまま夢中になって遊ぶ。自然や文化に触れて、体験して、感性が育まれる。

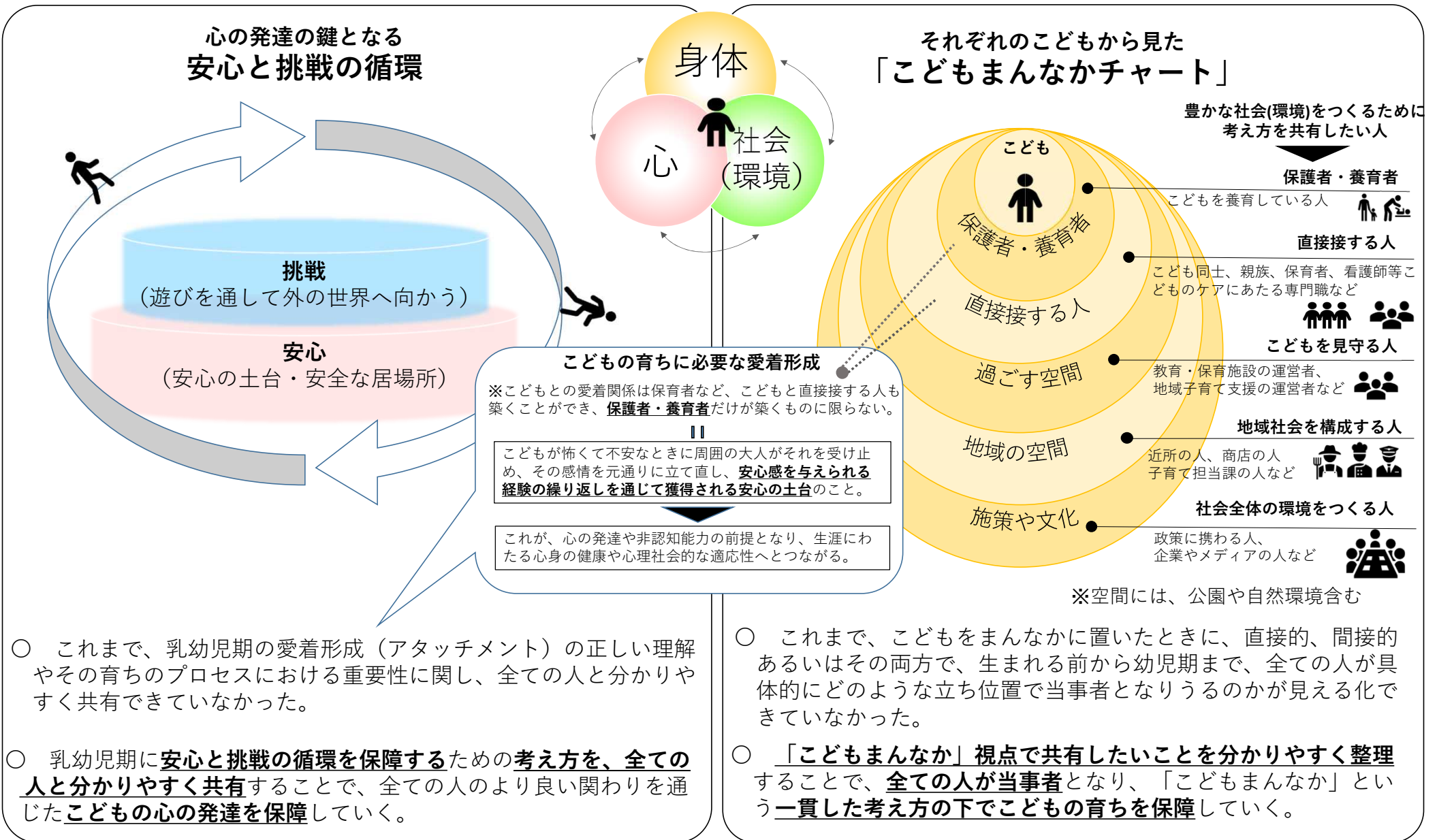
認められたい

周囲の人にありのままを受け止められ、自分の存在、ペースを認めてもらうことで、自分に自信がつく。この経験から、他者への理解や優しさにつながる。

乳幼児期のこどもの育ちは、心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎となる大切なもの

生まれる前から幼児期までの「こどもの育ちの基本的な考え方」

こどもの育ちに係る他の指針等と相まって、全てのこどもに、身体、心、社会(環境)の全ての面での育ちを保障するために育ちの時期を問わず全ての人と共有したい基本的な考え方



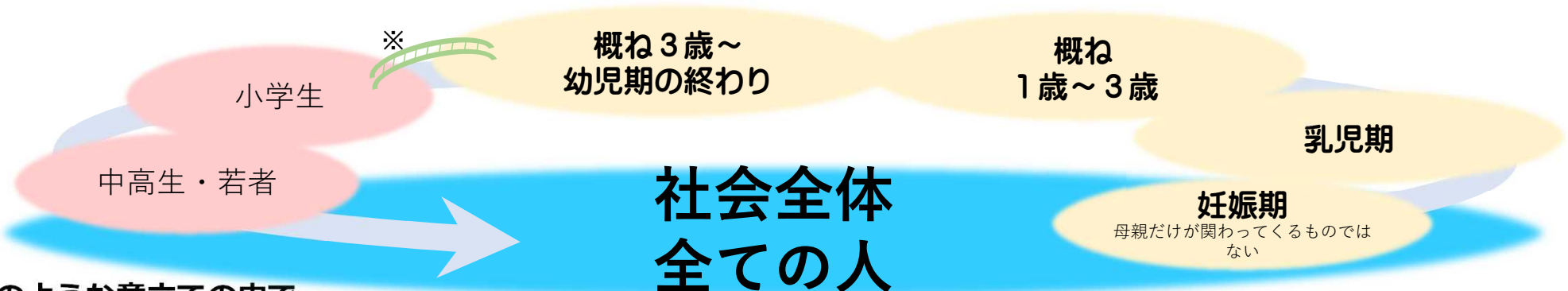
「誰に何を共有したいか」を整理した、指針の具体的事項

【指針の具体的事項の整理方針】

こどもにとってどんな時期に何があるといいかを考えやすくする観点から、

- ① 妊娠期
- ② 乳児期
- ③ 概ね1歳～3歳
- ④ 概ね3歳～幼児期の終わり

ごとにわけて章立てし、生まれる前から幼児期の終わりまでの過程を通じて切れ目なくこどもの育ちを保障するための具体的な考え方を小学生、中高生・若者、こどもと直接関わる機会がない人含む社会全体全ての人で共有。
あわせてこれらが小学生以降の育ちにどのようにつながっていくのかの考え方も共有。



このような章立ての中で、

- 身体・心・社会（環境）の視点を共有
- 安心と挑戦の循環による育ちのプロセスを共有
- 「誰に（保護者・養育者／直接接する人／こどもを見守る人／地域社会を構成する人／社会全体の環境をつくる人など）何を共有したいか」を整理した、具体的事項を示す。

（こどもと直接関わる機会がない人含む）

※5歳児から小学校1年生までの2年間を「架け橋期」と位置づけ、幼保小の協働による接続の改善を推進中

指針の考え方の実現に向けた政策課題（案）

⇒本懇談会として指針の素案とともにとりまとめ、こども大綱等の議論へ申し送り？【P】